



さあ、始めました！

本当はえろいホロライブ——『えろホロ！』のお時間です！

今週も、地上波では到底お見せできない倫理観ガン無視の60分となっておりまして、皆様どうぞお楽しみください！ MCは毎度おなじみ、わたくし「セック鈴木」がお送りいたします！

今回のターゲットは……なななな、なんと！

あの、ホロライブの始祖たるときのそらちゃんをハメちゃいました！

お、観客席がざわついてますねえ。

うんうん、わかりますよ。

そらちゃんはこの業界において、若くして大御所の地位を獲得したアイドルライバーのカリスマです。そんなそらちゃんをこんな下世話な番組でオナホ扱いしていいのか……辛抱強くホロライブ事務所を協議を重ねてきましたが、今回ついに、そらシコ許可をいただいた次第であります！

そして今回、我々が用意した企画は……こちら！

『催眠やらせ番組ならどんなにやばい暗示をかけられても従わざるを得ない説』

そらちゃんには今から、体験レポートという体で催眠術を受けてもらいます。

ちなみにこの胡散臭いおじさんが催眠術師の役です。

もちろんこの人は催眠術なんて使えません。

しかしそらちゃんには事前に話を通し、催眠術にかかったフリをしてもらうことになっています。

そらちゃんは真面目な娘ですから、やらせをすることに抵抗があったようですが……今回はホロライブと太い繋がりのあるスポンサーの名前を借りてますからね、事務所の方からくれぐれも失礼のないようにと念押ししてもらうことで納得してもらいました。

ではそろそろ、そらちゃんをお呼びしましょうか？

今回は観客席の皆さんを含め、スタジオの全員が仕掛け人となります。そらちゃんにオフアールしたのは偽番組であり、これがえろホロだと本人は知りませんので、皆さんもそのつもりでリアクションをお願いしますね。ではここからは進行を偽ディレクターに任せて、私は裏に引っ込みます。入れ替わるようにそらちゃんがスタジオ入りしました。

「おはようございます。ホロライブプロダクション所属のときのそらです。本日はよろしく願いいたします」



ああ、清楚の音お。

この場にそらちゃんがいるだけでマイナスイオンが大量発生しますねえ。そしてこの、礼儀正しさですよ。

どれだけ売れても初心を忘れないこの姿勢……なんて健気なんでしょう。偽ディレクターと最終確認の段取りを済ませて……さあ、いよいよ検証スタートです。そらちゃんは、どれだけ無茶振りを迫られても持ち前のプロ意識で受け入れてしまうのか？

「みんな、こんそめ。ときのそらです」

カメラに向かって両手を振るそらちゃん。はい、もう可愛い。タイトルコールとオープニングトークを手早く済ませて、

「記念すべき第一回目の不思議検証ファイルは、こちら。『催眠術って本当なの？ ガチンコ体験・ヒュプノスチャレンジ！』つということで……今回は有名な催眠術師の方に来ていただきました」

そらちゃんの紹介に合わせ、フードを目深に被った黒装束の男が登場します。

偽物のくせして割とそれっぽい見た目ですねえ。

そらちゃんにも何かを疑うような素振りはありません。

「はじめまして。オラクル小林と申します」

「はじめまして」

「早速ですが、今までに催眠術を経験したことは？」

「それが一度もないんですよ。だから今日は楽しみだけどちよつと不安……みたいな感じですよ」

「そうですか。では私が、あなたを未知の世界へ案内してご覧に入れましょう」

オラクルは懷から、五円玉に釣り糸を結わえつけた古典的なアイテムを取り出します。

それを振り子のように振りながら、

「あなたは段々眠くなる、眠くなる……！」

うわあ、偽物臭いですねえ……まあ実際に偽物なんだから仕方ないんですが。しかしそらちゃんは台本通り、眠気に襲われる演技をします。

「あ、あれ……なんだか、意識がぼんやりしてきました……」

「そう、あなたの意識はもう私の手の平の上……あなたはもう、私の言うことに逆らうことができません……右手を上げろと言えば、上げてしまいます……さあ、上げて」

「は、はい……」

そらちゃんは目蓋を半ば閉ざしながら、右手をすつと掲げます。オラクルはニヤリと微笑んで、

「では次に、スカートを持ち上げてパンティを見せてください」

「はい……って、え？ い、今なんて？」

「スカートを持ち上げてパンティを見せるんです、早く」

「え、えつと……」

そらちゃんは困惑しながら偽ディレクターに視線を送ります。
彼はカンペに「続けて!」と書き込み、そらちゃんに指示します。
そらちゃんは思い悩んでいましたが、やがてゆっくりと立ち上がりまし
た。
そしてオラクルの命令通り、自らスカートを持ち上げて純白のパンティを
スタジオ中に晒します。観客席から男臭い歓声上がり、そのお宝映像を激
写するべく無数のスマホを向けられます。



「この通り、私の手にかかれば人の意識を操ることなど造作ありません」
オラクルがばちんを指を鳴らします。

「さ、下ろしていいですよ」

「あ……は、はい」

「いかがでしたか？」

「あ、えっと……す、凄かったです! 身体が勝手に動いちゃって……は、恥
ずかしいのに、スカートを捲らなきゃっていう義務感? が込み上げてき
て」

「ふふふ。ドスケベパンツを穿いてなくてよかったですね」

「あはは……」

「ときのさんも、彼氏と会う日はそういうのを身に着けたりするでしょう?」

「いえ、そんなこと……彼氏なんていませんから」

「ほう、さすがはアイドルですなあ。しかし、あなたのような美人がもったい
ない……そんなにえっちな身体をしてるのに、相手がいないんじゃないムラつい
ちゃうでしょう? ですから……今日は私が、ときのさんの恋人になってあ
げましょう」

「へ?」

オラクルが再び五円玉を構えます。

「さあ、私はあなたの恋人です……あなたは私のことが好きで好きで堪らない……人前だろうと構わず抱きつき、口づけ、愛を求めてしまう……」

「あ、あ、あのっ」

「さあ、早くするのです……さあさあさあ！」

戸惑うそらちゃんに、偽ディレクターは鬼のようにカンペを連投して続けるように命じます。他のスタッフも誰一人この状況に異を唱える者はいません。

「わ……わかり、ました」

そらちゃんは意を決してオラクルに抱きつきました。

そして、その魅惑のルーージュをついさつき知り合ったばかりのおっさんに捧げてしまいました。

「んちゅう……ちゅ、ちゅうう♡」



「ふひひ、熱烈ですなあ……そんなに欲しかったのかな？」

「は、はい♡ あなたのことを見ていると、我慢できなくなっ……わたし、お父さんより年上のおじさまに一目惚れしちゃったみたいです♡ 収録中なのに、キスするの我慢できない悪い子でごめんなさい……ちゅぷ♡」

「さあもつと……思い切り舌を絡めるんだ。恋人らしいディープなキスをするんだよ」

「はい♡ ぢゅぢゅる……れろれろ♡ ちゅる♡ べろお♡」

「ほっほお……いいよ、ぐふふふ」

「やん♡ お、お尻……♡」

オラクルはそらちゃんのスカートの手をつ突っ込み、そのデカケツを我が物顔で揉みだします。その背後にカメラが素早く回り込み、ローアングルで人気アイドルのパンモロ映像をいただきました。柔らかなケツ肉がオラクルの手の中で形を変えていき、パンティがどんとアソコに食い込んでいきます。

「お、おじさま、だめえ♥ お尻が、撮られて……パ、パンツも♥」

「さっき自分で見せつけてたじゃないか。何を恥ずかしがっているんだ？」

むしろ、アイドルならもっとサービスしてやらないと……ほら、このデッカケツをカメラに向かってふりふりと振るんだ」

「そんな♥」

「やるんだよ、ほらっ」

「わ、わかりました……ふり、ふり♥ ふり、ふりい♥」

そらちゃんの下スケベケツ振りダンスに、客席のボルテージが一層高まります。

「やれやれ、清楚アイドルとは思えない姿だなあ？」

「ち、違います♥ これは、催眠術のせい……♥」

「確かに暗示はかけましたが……こういうのは、本人の深層意識に願望や欲求が潜んでないと上手くいかないものなんです。つまり、今までのことはすべてあなたが心の奥底で望んでいることなんです」

「う、嘘です♥ わたしはそんなえっちな子じゃ……♥」

「どうでしょうかねえ」

オラクルはそらちゃんの顎をくいっと持ち上げて、

「ときのさん……いや、そらちゃん。次の命令だよ。ちんぽをしゃぶれ」

「お、おちんぽを……っ♥」

「くく、そうだ……大好きな恋人のちんぽを、お前はしゃぶりたいでしょうがないんだ。人目なんてどうでもいい……お前はもう、口まんこでちんぽを咥えること以外何も考えられなくなる」

「あ、ああ……だめ、なのに♥ 身体が、勝手にい♥」

そらちゃんはオラクルの身体にしがたれながら膝を突き、ズボンのファスナーを唇で挟みます。社会の窓が全開になると勢いよく巨根が飛び出して、そらちゃんのほったを「べちんっ♥」と叩きました。

その赤黒い亀頭に、そらちゃんは躊躇いなくしゃぶりました。

「じゅるっ♥ ンれろっ♥ ぐっぽぐっぽ♥」

「そうだ、いいぞお……もつと奥まで咥えろ」

「はい……んぐ、ぢゅるるるるるるるっ、ぢゅぽんっ♥ ぢゅず、ぢゅぷん♥ ちゅぽ♥ れろ♥ ぺろ、ぺろ……ちゅ、ん、はああ♥ わたし、こん

なところで、本気のおフェラして……カメラに、撮られてるのに……♥」

カメラマンはそらちゃんの真横に移動して、至近距離からお口ご奉仕の様子を収めています。ここですっかりカメラ視線するあたり、そらちゃんもわかってますねえ。



「くう、上手じゃないか……本当に彼氏がいないのか？ 日常的にちんぽ啜えてなけりゃ、こんなテクは身につかないはずだがなあ」

「ほ、本当に、彼氏はいません……けど♥」

「けど、なんだ？」

「営業先で、よくおちんぽしゃぶってますから……それで♥」

「なるほどお。仕事熱心で関心だねえ……今まで何人くらい相手にしたんだ？」

「ひゃ、122人です♥」

「ほお？ そんなはつきり覚えてるのか？」

「大切なスポンサーさんですから……♥」

「おおっと、これは初出し情報じゃないですか？」

「思わぬ収穫ですねえ。枕営業の人数を逐一記憶しているとは、さすがそらちゃんといったところでしょうか。非公式メモにまたひとつ項目が追加されそうです。」

「んちゅう♥ ちゅぽっ♥ れろおおお……ッ♥」

「くうう、玉の裏までねぶられて……な、なんてフェラテクだ」

「ご、ごめんなさい♥ あんまり本気でやらない方がよかったですか……ちゅ♥」

「ああ、フェラはもう十分だ。次は……下のお口を堪能させてもらおうか」

「お、おまんこですか♥ さすがにそれは……♥」

「命令だぞ？」

「でも♥」

「反抗しても無駄だ……ほーら、あなたは段々ハメたくなる、ハメたくなる……」

「ああん♥ だめですうおじさまあ♥」

催眠術使われたら、わたし、わたし……逆らえなくなっちゃうのおお♥

大勢の人が見てるのに、おじさまの恋人ちんぽ、ぐっちょぐちよのおまんこで受け入れたくなっちゃいますう

♥」

そらちゃんはオラクルに身体を預け、再び唇を重ねます。自分からねつとりと舌を絡め、清纯派アイドルとは思えないドスケベろちゅーでスタジオを湧かせます。

オラクルはそらちゃんをひよいと抱き上げて、濡れそぼった秘裂に肉棒の切っ先を突きつけます。そらちゃんはもう一切抵抗しません。ずぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶつ——そらちゃんのおまんこに、デカちゃんが一気に飲み込まれます。



「んっはああああ……ッ♥ おじさまの、おっきい……♥」

「そらちゃんのも、凄くいいよ……くっ、なんてきつさだ。百本以上のちんぽをハメられた穴とは到底思えねえ……こりゃあ、リピーターが絶えないのも頷けるってもんだ。ホロメンの中でも、そらちゃんほどやってる子はいないでしょう?」

「そ、そんなこと、ないですよ♥ ホロには、多種多様なタレントが揃ってますから……わたしより経験人数多い子も、たくさんいます♥」

「マジかよ! とんでもねえなホロライブ!」

「んほっ♥ おおっオオッ♥ おんっおんっおんっ♥」

オラクルはそらちゃんを抱きかかえたまま、駅弁スタイルで激しくちんぽを出し入れます。その度にそらちゃんの大きなお尻が浮き上がり、重力によって落下するときは、根本まで「どちゅんっ♥」と腔内にぶっ刺さります。そらちゃんもオラクルにしがみついて、ノリノリでケツを振ってますねえ。

つと、ここで……偽ディレクターから指示が出ました。なにになに……一時的に催眠解除?

なるほど。ここで味変をひとつまみというわけですな。

オラクルがピストンを止めて、催眠解除の暗示をかけます。

「あ、え、あ……♥」

そらちゃんは、少しぼうっとしてますねえ。快楽に打ちのめされた頭じゃ状況をよくわかっていないのかもしれない。しかしすぐに意図を察したように、番組が求めているであろうリアクションをしてくれます。

「あひいいいいイイイン♥ 出てるううううう♥」

「どうだあ……エロまんこにたっぷり注いでやるぞお、嬉しいだろ？」

「う、嬉しいわけ、ないれしゅうう……♥」

「ほい、催眠」

「あつ、へっ♥ は、はひ♥ 嬉しいです♥ おじさまの愛情たっぷり恋人ザーメン♥ もっとそらのおまんこにぶち撒けて♥ 金玉の中でぐつぐつに

煮え滾ったちんぽミルク♥ ぜーんぶわたしの子宮に発射してええええ♥」

「くく、こっちのモードも捨てがたいなあ……んちゅ、ちゅ」

「ちゅむ♥ ちゅぶ♥ んっ♥ おじさま、しゅきしゅき♥」

「催眠解除」

「え、あつ♥ レ、レイプおちんぼいやああん♥」

オラクルの命令ひとつで次々と表情を変えていくそらちゃん。
うーん、プロ根性ですねえ。

そらちゃんのおまんこに注がれた精液の量は尋常ではなく、結合部から飛び出した白濁汁がスタジオの床にどこまでも広がっていきます。その精臭たるや凄まじいこと……そらちゃん、しばらく精子のニオイが取れないでしょうねえ。

じゃ、ここらでネタバラシと行きましょうか。

私は看板を手に、そらちゃんへと歩み寄ります。

テッテレー！

「へっ……あ、あの、なんですか？」

オラクルに抱っこされ、ちんぽを挿れられたまま、そらちゃんは目をぱちくりさせています。

「え？ え？ え？ な、なんですかこれ？ え？」

実はですねえ、不思議検証ファイルなんて番組ないんですよ。
これ、えろホロなんです。

「えっ……えええええええっ？ 嘘おっ？ だってわたし……な、なんにも聞いてませんよ？」

そりゃあ事前に言うわけにはいきませんからねえ？

今回の企画の内容を説明すると、そらちゃんは気が抜けたような笑みを浮かべた。反対にオラクルは、バツの悪そうな顔をしながらそらちゃんを下ろします。スタジオが一体となって和やかなムードに包まれました。
どうでしたか？

「どうって……こ、これはやりすぎですよー。本当におちんちん挿れるんですもん。えろホロスタッフは過激だとは聞いてましたけど、全部ガチだったんですね……？」

どこらへんからおかしいと思ってました？

「そ、そんなの……パンツを見せるように言われたあたりから、ずっとです」

まあそうでしょうねえ。

でも、最後までやり遂げくれましたね。特に、催眠と催眠解除を繰り返すシーンの演技は迫真でしたよ。あんな無茶振りに真剣に対応する姿に我々一同、胸と股間が熱くなりました。

「む、蒸し返さないでください。今回の出演はホロの今後に影響するような大きなお仕事だって聞いていたから、なんとか期待に応えなくちゃって思ってた……」

ええ、そこに関してはもう、期待以上の撮れ高でしたよ。
まさかそらちゃんがここまで乱れるとは！
ぶっちゃけ、どこまで演技だったんですか？

「そ、それは……秘密です♥」

おおっと、なんて妖艶な笑みでしょう……
どうやら、これ以上ツッコむのは野暮ってもののようなのだ。
じゃあ、最後に番宣よろしいですか？

「あ、はい……わたし、ときのそらもとうとう出演させられちゃった、えろホロ♥ ホロライブメンバーのあ〜んな姿やこ〜んな姿が見られちゃう、怖い物知らずのドスケベバラエティだよ♥ みんな、よろしくね♥」



というわけで、次回のえろホロでまたお会いしましょう。













